内科疾患と脳神経疾患

阿部 康二

〔日内会誌 101：2161～2162, 2012〕

Key words 内科疾患, 脳神経内科疾患, 生活習慣病, 神経難病

内科臨床において脳神経疾患は患者数が多いだけでなく、分野も脳卒中などの血管障害や認知症などのcommon diseases以外にも、Parkinson病や筋萎縮性側索硬化症、脊髄小脳変性症といったいわゆる神経変性疾患、重症筋無力症などの神経筋接合部疾患、末梢神経障害、筋疾患、さらには脳炎や髄膜炎、Guillain-Barré症候群などと多岐に及び、場合によっては診断に苦慮するケースも稀ならず経験します。また日本社会の高齢化に伴って、高齢化と関連する様々な疾患数が増加している中でも特に神経内科疾患の患者数増加は著しいものがあります。従って内科医はもとより内科以外の診療科においても神経内科疾患と遭遇する機会は飛躍的に増加しているのが現状であると思われます。

日本は2010年現在で世界の中で最も高齢化の進んだ超高齢化国家となっており、今後約20～40年間はそのまま世界の超高齢化トップ国であり続けるだろうと予測されています。このような超高齢化社会の持続に伴い高齢者数も2050年まで増加の一途を辿るとされていますが、2010年は前期高齢者数と後期高齢者数が丁度1,400～1,500万人ぐらいで同数になっており、今後は後期高齢者数が前期高齢者数を上回るものと推測

されています。このような後期高齢者は大中医院への受診自体が困難な場合が多いので、患者宅近くで開業されているかかりつけ医の先生方の存在はまず第一にこの点で極めて重要であると思っています。

2001年の国民生活基礎調査によれば、日本人の寝たきり原因の第1位は脳卒中であり、次いで高齢衰弱、骨折転倒、認知症、関節疾患の順となっています。この中には認知症で寝たきりになった患者が肺炎や気管支炎などの気道感染症で死亡するケースが急増しており、抗生物質がこれほど発達したにも拘わらず感染症による死亡率は現在第4位にまで増加してきています。患者の身近にあって患者自身と家族を熟知しているかかりつけ医の先生方の存在は、寝たきり患者医療という点においても極めて重要であると思いますが、その寝たきり原因の上位は殆ど脳神経内科疾患です。さらに往診専門診療の6～7割は脳神経疾患となっています。

このように、今や脳神経疾患への理解なしには内科診療が出来ないと言っても過言ではない状況になってきています。そこで本特集では、高血圧や脂質異常症、糖尿病といった生活習慣病ならびに慢性腎臓病（CKD）と関連深く内科

岡山大学病院脳神経内科

Internal Medicine and Neurological Diseases: Progress in Diagnosis and Treatment. Editorial: Internal medicine and neurological diseases.

Koji Abe: Department of Neurology, Okayama University Medical School, Japan.

Editorial

医が遭遇する頻度の高い脳神経疾患としてまず脳卒中や認知症の問題を取り上げ、次いで消化器疾患や内分泌代謝疾患、膠原病、血液疾患と関連深い脳神経疾患について詳述していただき、さらに高齢化で増加している様々な癌と関連深い脳神経疾患、女性と脳神経疾患、一般的な内科感染症と関連深い脳神経疾患等についてこの分野でご活躍の諸先生方に執筆をお願いしました。また座談会においては、内科神経内科医としてご開業されている京都市の立岡良久先生、東京の大学病院で診療されている松村美由起先生、一般病院神経内科勤務医の成川孝一先生、

研修医の松菌構佑先生にご出席いただき、同じ神経内科専門でも異なるお立場で診療されている先生方のお話を拝聴させて頂きながら、一般内科診療と関連深い脳神経疾患について最近のトピックスを中心にお話しいただきました。

本特集が少しでも一般内科の先生方の日常診療のお役に立つことがあれば、大変有難いと考えています。

著者のCOI (conflicts of interest) 開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし